

司書のいる学校図書館の風景

学校図書館には子どもたちが集います。

本を読み、学習をし、ほっと一息つきに。

そんな学校図書館の風景を学校司書が伝えてくれました。

今回は、富山市の学校図書館司書からの便りです。



〇〇小学校の図書室は3階。1年生の教室は1階にあり、遠い。それなのに私が勤務する火曜日と水曜日は、いつも息をきらせて数人の1年生が図書室に飛び込んで来る。

めいめいお気に入りの本を選んで「先生、これ読んで」と言ってくる。もちろん自分で読めるけれど、読んでもらうのも好きみたい。

こうして本に親しんでいってくれるのだと思う。微力ながら子どもたちと本との橋渡しをしていると感じられる。この仕事をとても誇りに思う。
(米本)

小学3年生国語に「本と友だちになろう」という単元があります。韓国の昔話「三年とうげ」を教材文として学習した後に位置づけられ、本の帯を作る活動が提示されています。

ここ数年、この学習活動に司書がT・T（ティームティーチング）の形で参加しています。例年は3年生の教室へ出かけて行ましたが、今年度は参観日に学校図書館で行いました。

司書は、本についている帯を使って「帯とはどんなものか」「いろいろな帯の紹介」「作るときのヒント」などの説明をし、授業の導入部分を担当します。事前に例示する本の帯を選び、子どもたちに説明する内容を担任と相談します。司書から一番伝えたいことは「本は誰かに読んでもらいたくて生まれてくる」ということ—書いた人、絵を描いた人、作った会社の人、たくさんの人の手を経て書店や図書館に並ぶわけですが、「この本に目を向けて欲しい」という気持ちを伝えるために帯が大切な役割を果たしていることを話します。

そのことをふまえて、友だちに本のおもしろさをわかり易く伝えられるように、帯を作ってみようと投げかけます。帯を見せると、子どもたちは「字の大きさ」、「色」、「イラスト付き」、「キャッチ・コピー」など、目をひく要素に気付き、それを参考に作ってみたいという声があがります。

実際の作業に取りかかると、子どもたちの表情は真剣そのもの。それぞれにお気に入りの本を書架から取り出して、おもしろかった感想を得々と述べたり、配色豊かに色を塗ったり「さあ、いったいどうなるのでしょうか!？」と誘い文句をつけたり、工夫を凝らした帯ができあがりました。

本と触れあう子どもたちと学校図書館の様子を保護者の方にもみていただける良い機会となりました。完成した帯は、早速図書館に展示し、全校の子どもたちに披露しました。低学年には「早く3年生になって帯を作りたい」と言う子も……。もちろん、帯のついた本はどんどん借り出されて貸出しに大いに貢献してもらうことができました。

(どろんこ)

「バスケットの本とか、ないが?」つまり、スポーツのルールや上達Bookではなく、小説・読み物でということ。我が中学にはバスケット部はない。小規模校ゆえ、かぎられた部活動しかないのだ。

そう、彼はバスケット部ではない。しかし、バスケットをこよなく愛する少年なのである。「最近こういう本とかでてるよ。どう?」と、さらっと薦めてみる。数日後、「面白かった。続きは?」。彼はその小説を友だちにも薦めていた。数日後、「他にないが?」「何か面白い本ある?」「何か読みたい。」「忙しくて図書室行っていないなあ。」司書の私の顔を見る度、廊下ですれ違う時や図書室の入口で何気なくつぶやく彼の言葉を拾

ってすかさず「これどうかな？」と薦めると「うん。」と、素直に手に取って読んでくれるようになった。初めて顔を合わせた時、挑むような目で私を見ていた彼はちょっぴり柔らかくなった。

既に卒業してしまった生徒らと「新しいのどんな本読んでる？おススメは？」「面白い本紹介して！」「この本、もう読んだ？」などと教えあったりしている。世話をしているというより、されている感じなのだが…。図書室をこよなく愛してくれた生徒との絆で私という司書が形成されているのではないかと思えてくる。たった一言なのだが「笑った」「良かった」「泣けた」「感動した」「続編は？」…等等。

返却するときに交わす言葉。本を読んで心が豊かになった生徒や子どもたちのサイン。

彼らと、私・司書とのあいだに共有される一瞬の柔らかな空間。それを求めて図書室にいる司書に会いに来る。「見て！ちょっぴり成長したでしょう！？」彼らの奥底にある誇らしげな感情がちらっと顔を出す。「うん。」と頷く。もちろん、お互い暗黙の了解。

(たゆとうシオン)

学校図書館には毎日様々な質問が寄せられる。校庭でみつけた虫の卵や拾った鳥の羽根さえも「これは何だろう」と持ち込まれる。子どもたちには「知りたい」エネルギーが満ちている。

「人質の本はありますか」6年生の女の子が質問に来た。はて物騒な、人質の本とは何だろう。対話をするうちに参勤交代について調べたいのだとわかる。女・子どもが江戸に人質に置かれたという教科書の一文にひっきりを覚えたのだと、怖いと思ったのだと彼女は言う。資料を得るためのキーワードがずれているとしても、自分の身に引き寄せて想像することができる彼女の思いは、調べる活動を支えるだろう。

子どもから発せられるたった一つの単語から始まる質問。その質問の意図を探るために子どもからの語りをゆったりと待つこと、資料要求を具体的にするために何度も忍耐強く尋ね返すこと、それ以前に、子どもから語りかけられる司書であることをいつも肝に銘じている。

小さな質問の中にはいつも子どもの強い思いがある。「星の本は？」「食事の本は？」、それらを探っていくと「今度、山に行くんだ。星をカメラで撮影してみたい。うまく撮る方法はあるかな。」「陸上競技大会に選手で出るの。競技前にいつどんな食事を摂ったらいいかな。」と、新しい試みに向ける期待感や試合にベストを尽くそうとする意気込みが見えてくる。

子どもと一緒に資料にあたりにながら、学校図書館は確実な資料提供の役割を担うだけでなく、その強い思いを応援する役割を持つのだと感じる。子どもの「知りたい」エネルギーに動かされ、多くの質問に鍛えられ、子どもと共に学ぶ学校図書館でありたいと思う。

(Kuro)

〇〇小学校では、朝の読書の時間や授業の合間に、担任の先生が時々子どもたちに読み聞かせをされているようで、そのために、「良い本はありませんか」と司書に聞かれます。

たとえば、「友だちと仲良くなるような本」「けんかをした後の気持ちがわかる本」「向上心が芽生える本」など具体的に聞かれることが多く、私自身もとても勉強になり、楽しく本を探しています。

また、本棚に並んでいるだけではなかなか借りられないシリーズものの中の1冊を先生にお渡しして読んでもらうと、そのクラスでそのシリーズが大人気になります。子どもたちに一番身近な担任の先生の働きかけで子どもたちの読書の世界が少しずつ広がっていくようです。

〇〇中学校では、カウンター横に映画のパンフレットがよく置いてあります。原作本への貸出に直接繋がることは少ないですが、パンフレットをきっかけに生徒といろいろな話をして、図書室が学校の中で楽しくつろげる場所になれるようにと思います。

(そら)

「先生、暇そうだね、ちょっと話し聞いてよ」そうって図書室にやってきた2年生女子2名。どうやら担任にしかられた様子で、さかんに担任の悪口を言って息巻いている。受入作業中の本の山に心を残しながら手を止めて2人と向き合い話を聞く。

「ああ、そりゃあ、アナタたちが悪いよ。」などと彼女たちの大きな勘違いを正しつつ、話はお化粧の話、おしゃれの話、コンビニの話、家族の話…、取り止めなく続く。そのうちに二人は、何か本を読んで欲しいと言い出した。怖い本がいいと…。

怖いと言うなら、戦争関係の話は怖いぞ！病気の話も怖いぞ！ごきぶりわさわさ出てくるアレはどう？いやいや、彼女たちの頭の中には『学校の怪談』とか小学校で慣れ親しんだホラー系のものが浮かんでいるらしい。しかし、本校の図書室には所蔵しておらず、それならば、ラフカディオ・ハーンはどうだ！う～ん、見当たらない。ふと、作業中の本の山に目がいった。今昔物語を易しく解説して絵本風に仕上げたものを購入していたことを思い出し、その1冊を読み始める。

「…、この時代は電気もガスも無く、もちろん、テレビもゲームも携帯もありません。」

「うっそ！どうやって生きるん？」

「怖っ！今でよかった。」

「ほら、怖い話でしょう。」

神妙に最後まで読み聞かせに見入っていた2人に最後に中学生一般常識をレクチャー。ここに出てきた話のひとつは芥川龍之介って人が『鼻』っていう作品にしているよ、大体の内容は今読んだのでわかったね。テストに出たら楽勝だね。という大きく頷く。

「何か本借りようかな？」そう言って、入館時のふくれっ面は忘れ、2人とも本を借りて出て行った。（読み聞かせた本でなかったのはちょっと残念だったが）その後姿に「学校くるときに化粧はしないのよ。」と念を押すと、「はあい。」と後ろ手に手を振っている。

廊下からご機嫌な声が聞こえてきた。

「ねえ、〇〇先生、芥川龍之介ってしっとる？あのねえ…」

「忙しそうにしていたら司書失格。」

かつて、斐太高校の小池司書に言われた言葉。教師ではない司書は指導はしない。指導はしないけれど無意識に誘導をしているのかもしれない。

図書室にきたら何かあるよ。ほら！本が読みたくなあ～る、借りたくなあ～る、と。

（図書誘導員）

今回、1年を通して6年生が『カンボジア』について学習することになり、1学期、6年生の学習スペースにコーナーを設けました。先生からは「よりカンボジアの子どもたちの現状が生活ぶりが分かる資料を」と依頼を受け、できる限り新しい資料を購入し提供しました。

2学期は、「そのようなカンボジアの子どもたちに、自分たちは何ができるのか」と一歩踏み込んだ学習に入っていきます。現状を調べて「さて、何をすべきか？で止まっている子が多い。何か一歩踏み出すヒントになる資料を」と依頼をうけ、ブックトークをすることになりました。

この学習で、私は、学校司書として新しい発見をさせてもらいました。それは、仕事として資料を提供する側、子どもたちは、される側という立場で、ずっと仕事を続けてきました。ところが、資料を読み込むうち、「では、カンボジアの子どもたちに私は何ができるのだろうか？」と思い立ちました。

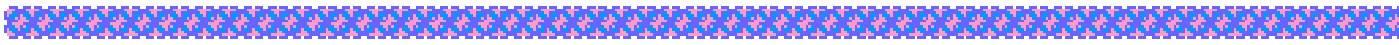
考えていくうち、6年生の子どもたちと同じ目線、同じように課題に取り組む自分がいました。同じ目線で寄りそうことで、悩んでいる子のイメージがつかみやすくなっている自分がいました。学校司書という仕事の深さを発見させてもらいました。

きっと子どもたちが悩んでいる「何ができるか」も、支援してあげる側、される側と言う立場ではなく、カンボジアの子の目線に立つことで、今の自分にできることは限られているけど「自分だったら」と寄りそ

うことで、問題の糸口が見つかるような気がします。

こうして、本と子どもたちに関わって、自分も勉強できて、学校司書って幸せですね。

(S)



春に注文した本が届いた。その中にある作家さんの童話集があった。5巻セットもので表紙の色が緑・赤紫・青・黄と1巻ごとに分けられていて二色使い。絵はあまり目立たず、その分シンプルで美しい。

実は注文時に書店さんに付属のカバーをはずして透明フィルム掛けを頼んだものの一つだった。書店さん本の納入時に一緒に付属カバーも届けてくださっている。付属カバーにはイラストが入っていた。

「どうしよう」、はたして付属のカバーをかぶせた方がよいものか。表紙は付属カバー無しでも十分に美しい。迷った末に結局付属カバー無しで配架した。蔵書登録した新しく入った本を本棚に並べた。

その中に例の童話集もあった。

子どもたちは「新しい本」の棚に群がり、本は次々と貸出されていった。しかし、例の童話集は残ってしまった。一週間、二週間、子どもたちは童話集に手をつけない。「やっぱり…」それは大人の目にはシンプルで美しく見えても、子どもの目には寂しく、手に取らせるだけの魅力不足になってしまっていた。

わたしはすぐに童話集に付属カバーを被せコート掛けしなおし、「新しい本」の棚に配架した。

数日後、童話集は本棚から子どもたちに連れられ貸出カウンターにやって来るようになった。

「司書は子どもの目を持って本を見ないといけないな。」と、そう思った。

(H)

